聖　書：使徒 24：1〜27
説教題：おりを見て
日　時：2014 年 8 月 17 日

ユダヤ人のある者たちは、ユダヤの最高議会と組んでパウロを暗殺しようとしましたが、パウロはその前にローマの千人隊長によって、エルサレムからカイザリヤへと護送されました。ユダヤ人たちはどんなに苦々しく思ったことでしょうか。もはやパウロに手を下すためには、カイザリヤに出向いて行って、ローマ総督に訴えるより他はなくなります。さっそくそのことを試みたことが、この 24 章に書かれています。

大祭司アナニヤと長老たちは今回、テルトロという弁護士を一緒に連れて行きました。その弁護士テルトロが訴えた内容が 2〜8 節にあります。彼はいかにも熟練した弁護士らしく、まずはローマ総督ペリクスのご機嫌を取るようなほめ言葉を並べます。訴えの内容より先に裁判官の心を勝ち取ることが裁判を有利に進めるための基本的なテクニックだったのでしょう。しかし訴えの中身に入ると、どうも決定力がありません。彼の言っていることは 3 点にまとめられます。

第一点は、パウロは「まるでペストのような存在で、世界中のユダヤ人の間に騒ぎを巻き起こしている」ということです。ローマの平和が確立されている時代に、その平和をかき乱す活動を彼はしていると言います。彼はペストのような存在で、放っておくと大変なことになる、と警告します。

第二点は、「彼はナザレ人という一派の首領である」ということです。すなわち彼が宣伝している宗教は異端的であるということです。自分たち公認されているユダヤ教とは異なるもので、放置しておくなら様々な問題を起こしかねない厄介な存在であると。

第三点は「この男は宮さえも汚そうとした」ということです。宮に関することは宗教的な事柄ですので、ローマには直接関係ないこととも思われますが、エルサレム神殿の重要性、その影響力を考えるなら、ローマも無関心でいるわけにはいかないでしょう。そのことに関係する根本的な罪を彼は犯したと訴えています。一緒にいた者たちも同調し、「全くその通りでございます。パウロという人物はこのように大変危険で困った奴なのです」と言わんばかりのジェスチャーを取ります。

これに対してパウロは一つ一つ反論します。まず第一点の「世界中に騒ぎを巻き起こしている奴」という訴えに対しては、自分は騒ぎを起こすためではなく、ただ礼拝のためにエルサレムに来たことを述べます。そしてまたそれから 12 日しか経っていないことに触れて、この短期間で騒ぎを起こすための準備などできるはずもないと述べます。二つ目の「異端的である」との訴えに対しては、確かに今や彼らと異なる派に立っていることを認めます。しかし「律法にかなうことと預言者たちが書いていることを全部信じています」と述べ、また義人も悪人も復活するとの望みを彼らと同様に抱いていますと述べます。こうしてパウロは彼らと解釈が異なっているとは言え、自分たちこそイスラエルの宗教に忠実な者たちであると述べます。第三

点の「宮さえ汚そうとした」という訴えに対しては、事実無根であると述べます。汚すどころか、パウロは宮の儀式を守っていました。それを誤解した人たちが騒ぎを巻き起こしただけであって、もし私が何か不正を行なったと言うなら、それを証言できる人が直接ここに来て訴えるべきだと言います。議会においても私は何ら不正と断罪されるような言動は取っていない。述べたのはただ一言、「死者の復活のことで、私はきょう、あなたがたの前でさばかれているのです！」という言葉だけだった、と。

さて、これを聞いたローマ総督ペリクスは、どのように判断したでしょうか。22 節でペリクスは「千人隊長ルシヤが下って来るとき、あなたがたの事件を解決することにしよう」と言って、裁判を延期したとあります。それは彼が「この道について相当に詳しい知識を持っていたから」とあります。すなわちペリクスはユダヤ教とキリスト教の違いについて、すでに知識を十分に持っていたのです。そしてこれがユダヤの宗教内部の問題であって、ローマの平和を脅かす種類のものでないと分かっていた。別の言い方をすれば、キリスト教は危険な運動ではないし、断罪すべきものでないことをわきまえ知っていた。それならパウロは無罪であると言ってくれれば良いのに、と私たちは思うかもしれません。しかし 27 節にありますように、この地を治めるローマ総督としては、ユダヤ人に恩を売っておきたいという思惑もありました。パウロは無罪とだけ述べれば、ユダヤ人たちが暴動を起こすかもしれません。そこでペリクスにとって一番都合が良いのは、裁判を棚上げすることでした。千人隊長ルシヤがより詳しく知っているから、彼が来るまで延期！とすることです。もし本当にルシヤからの情報を得て裁判を決着させる意思があったら、すぐにでもそれはできたでしょう。しかしペリクスはこれを口実にして、とりあえず決着は付けず、問題を延ばし延ばしにすることにしたのです。これがペリクスが取った道でした。彼がこのような人であったことは、おそらく次のエピソードとも関係するのでしょう。こうして 24 章前半は、福音を宣べ伝えるパウロに対するユダヤ人の訴えは当たらないこと、キリスト教はローマによって悪とは判断されなかったこと、何ら危険な運動と見なされなかったことを示しています。むしろ 23 節にあるように、神が立てたローマの秩序の中でパウロは守られました。なお監禁状態にあったとは言え、それまでに比べたらずっと良い仕方で自由を与えられ、友人たちが世話することを許されたのです。

さて、今日の章の特別な関心はその後の部分にあると思われます。数日後、ペリクスはユダヤ人の妻ドルシラを連れてパウロを呼び出し、キリスト・イエスを信じる信仰について話を聞いたと 24 節にあります。ペリクスがキリスト教について詳しい知識を持っていたのは、この妻ドルシラによるところが大きかったのかもしれません。このドルシラは使徒の働き 12 章で使徒ヤコブを剣で殺し、ペテロまで殺そうとしたあのヘロデ・アグリッパ 1 世の娘でした。また彼女の伯父はバプテスマのヨハネを殺したヘロデ・アンティパスであり、ひいおじいさんは生まれたばかりのイエス様を殺そうとしたあのヘロデ大王でした。このような家系に育った彼女はキリスト教についての知識を持つようになり、良い意味か悪い意味か定かでありませんが、興味を示すようになっていたのでしょう。また当時の歴史書によると、彼女は最初の婚約が破棄になった後、エメサの王アジズと結婚しましたが、ペリクスが彼女に一目惚れし、何と魔術

師を使って離婚させ、結婚したという、ペリクスにとって 3 番目の奥さんでした。ある意味で暗い過去を持つ人です。その彼らがパウロの伝える宗教について話を聞く時を自ら持ったのです。

この二人にパウロは何を語ったことは「正義と節制とやがて来る審判」でした。正義とはここでは何が正しく何が間違っているかという神の義の基準のことでしょう。節制とはセルフコントロールのこと。神の義の基準に従って人はどのように自分を律して生活すべきか、ということ。そしてやがて来る審判とは最後のさばきのことでしょう。15 節に「義人も悪人も必ず復活する」とあるように、人は死んで終わりではなく、死んで後、すべての人が復活させられて、一人一人神の前で審判を受けるという日のことです。

このメッセージに接したペリクスの反応が二つ記されています。一つは「恐れを感じた」ということです。彼はまさかこんなことになるとは思わなかったでしょう。第三者的に、興味本位でキリスト教とはどんなものかと耳を傾けていたのに、パウロの話はどんどん自分に切り込んで来て、自分の生き方が問われる結果となってしまった。神の正義に照らし、また節制の要求に照らし、全くかなっていない自分。こんな自分がそのまま行けば、やがて来る審判の日には大変なことになる。非常にまずいことになる。

しかしペリクスが示した最終的な態度は「おりを見て、また」というものでした。すなわち彼は、もう今日はそこまでで良いとして、自分の態度を決めるのを先延ばしにした。別な言い方をすれば、逃げた。せっかく近くまで行ったのに、後ろに引っ込んで行った。そこには彼の下心も働いていたことが 26〜27 節に書かれています。すなわちパウロからお金をもらいたい、釈放する権威を持っている者として賄賂をもらいたいという気持ちがあった。また先に見たように、ユダヤ人の歓心を買いたいという計算もあった。パウロを通してやがて来る審判に恐れを覚えつつも、現世における誘惑を断ち切れず、それをとりあえず優先させ、キリスト教の話については「おりを見て」「もっとちょうど良い時が来たら」という態度を取った。しかしその「おり」は来たのでしょうか。27 節を見ると、ペリクスは 2 年間、この状態を続けた末、後任に取って代わられたことが記されています。すなわち「おりを見て」「おりを見て」と言っていた人に、その「おり」は来なかった！せっかく救いにあずかるチャンスがあったのに、近くまで行きながら、結局、福音を拒絶した人の姿がここにあります。彼はやがて来る審判に対して何の準備もしないまま、その日を迎える人の道を行ったのです。

これはここを読むすべての人にとっての警告でしょう。果たして私たちはどうでしょうか。聖書は私たちにも正義と節制とやがて来る審判について語っています。このメッセージをまともに聞いて、恐れを覚えずにいられる人は一人もいないでしょう。私たちは自分一人ではやがての神のさばきの前には立ち得ない者です。しかし神はそのようなあわれな私たちのめに、ご自身の御子キリストを与えてくださいました。この方の十字架の身代わりの死によって私たちの罪を赦し、この方の地上の完全な義の生涯によって私たちに義を用意してくださった。このキリストを信じる信仰を通して、神との正しい関係に立てるというのがキリスト教の福音です。この神との正しい関係に立たせていただくなら、もう最後の審判は恐れなくて良い。私たちに

残されているのは、この神の救いに感謝して、神の恵みにより頼みながら、神に従って行く生活だけです。私たちはこの福音を受け入れて神と正しい関係に立ち、神に従う生活へ進む者でしょうか。それともペリクスのように「おりを見て」と言って、その決心を先延ばしにする者でしょうか。ある人が言っていたたとえですが、サタンは 4 人の悪霊のリーダーを集めて、どうやったらもっと多くの魂を地獄に落とすことができるか、話し合っていたそうです。「何か良いアイデアはないだろうか。」それに対して最初の悪霊が言いました。「地上に行って、神なんかいないのさ、と人間にささやいたらどうか。」しかしサタンは言いました。「それではあまり大した効果は期待できない。人間は誰でも、神はどこかにおられるという感覚を生まれつき持っているものだ」と。2 番目の悪霊が言いました。「それじゃあ、天国なんてものはどこにもありやしないのさ。この世がすべてなんだから、後のことは心配しないで今を楽しく生きよう！と言ってみたらどうか。」しかしサタンはまたしても「いや、人間は死後の世界があると感じているし、天国に行きたいという願いを強く持っている」と言いました。そこで 3 番目の悪霊が言いました。「じゃあ、逆に地獄なんてものはないんだから、何をやったって大丈夫と言ってみたらどうか」と言いました。サタンはまたしても首を横に振り「いや人間は、自分の罪はどこかで罰せられると感じているのだ」と言いました。「もっと良い方法が我々には必要である！」とサタンは言いました。その時、4 番目の悪霊が言いました。「答えは簡単さ。地上に行って、人間どもにこうささやけば良い。何も急ぐことはないのさ。信仰のことなんかは、また明日になってからゆっくり考えようではないか」と。

聖書はこれと反対に「きょう、もし御声を聞くなら、心をかたくなにしてはならない。」と語っています。神が語っておられる「きょう」を大事にするように！と。今が特別の恵みの機会であることを尊んで、自分の救いに生かすように！と。私たちは心をかたくなにしないで、この福音に応答する者でありたいと思います。「おりを見て」と言って、その日が決して来ないペリクスのような人になることがないように。キリストにある神の招きを感謝して受けれ、キリストを信じて神との正しい関係に立たせていただき、救いの祝福へ入る歩みへ進みたいと思います。